

＜斜面内部の構造＞

上記のような分類に従って、この山体の中の構造を考えてみたのが、図4-3である。破碎程度の分布を見ると、斜面の深部では割れ目の少ないインタクトな岩石の中に散点的にPまたはDの部分が生じており、地表に近くなると、DやJ₁、J₂が増加する様子が認められる。上部斜面の地表から最大50mの深さまでJ₁からDゾーンの卓越するゾーンがあり、これは斜面下方に向かって薄くなり、河床からの比高70m付近で消失する。この“混合”ゾーンの下には、Cゾーン（DとJ₁ゾーンを伴う）がある。興味深いのは、斜面の最下部では、20-50mと厚いJ₁ゾーンがあることである。それぞれのボーリング孔の最深部はIゾーンであり、その上にCゾーンとDゾーンがある。このIゾーンの最上面から5-10m下には、No.5とNo.2のボーリング孔では、薄いPゾーンとDゾーンが含まれている。そして、ボアホールテレビ画像によれば、No.5ボーリングのこのPゾーンの2m上には、東南東方向に岩盤がずれて動いて形成された空隙が明瞭に認められた（図4-4）。この空隙は、上下に8cm離れた2つの層理面に沿う岩盤のせん断によって形成されたもので、幅1-2mmである。その中は空洞で何も充填されていない。No.1孔には、Iゾーンの上面から3m下

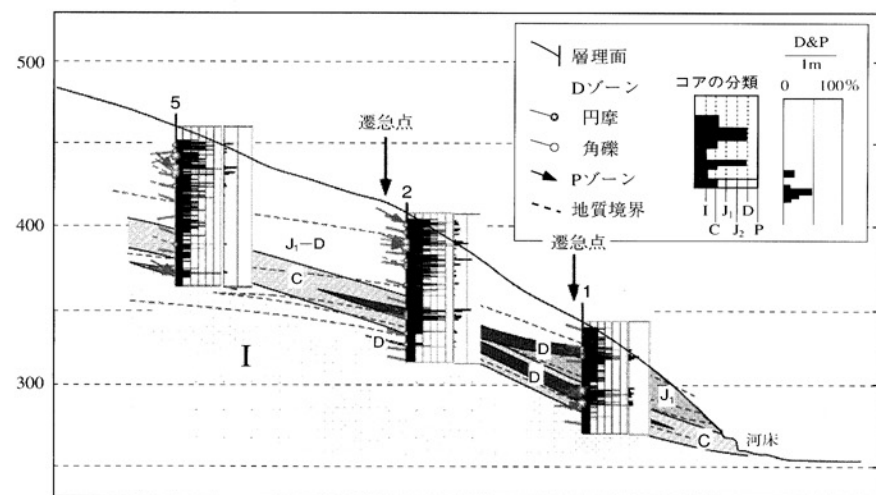


図4-3 斜面の内部構造を示す断面

Dゾーンは細いバーで示した。Dゾーンに含まれる岩片が角礫が円磨されているかを分けた。D&P/(1m)は、1mの区間に含まれるDゾーンとPゾーンの和のパーセンテージ。

(Chigira et al., in press)

に厚さ13cmのJ₂ゾーンがあり、これがおそらく上記のPゾーンとDゾーンの延長にあたる。

個々のDゾーンとPゾーンの厚さは、それぞれ88cm以下と19cm以下であった。大部分のPゾーンはDゾーンに伴っており、Dゾーンの岩石がさらに破碎されてPゾーンになることがうかがえる。DゾーンとPゾーンの分布から見ると（図4-5）、20mから30mの深さにこれらが多いことがわかる。それらの内ボーリング孔No.2とNo.5のものは連続するとみられるが、No.1のものは、断面的にみてNo.2のもっと深部のDゾーンにつながっている。深部のDゾーンとPゾーンは、No.2孔の60-70m、

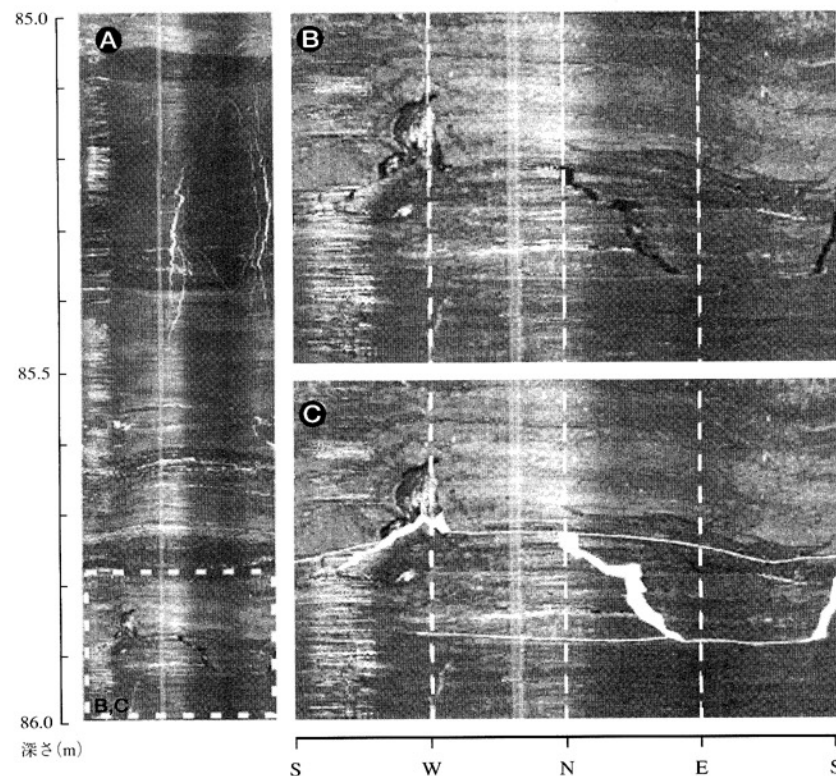


図4-4 岩盤内に形成された空隙

#5孔の85.9m深さのボアホールテレビカメラによる展開画像。BとCはA下部の拡大。CはBの空隙の部分に白く塗色したもの。上の岩盤が東南東方向にずれた結果この空隙が形成されている。(Chigira et al., in press)